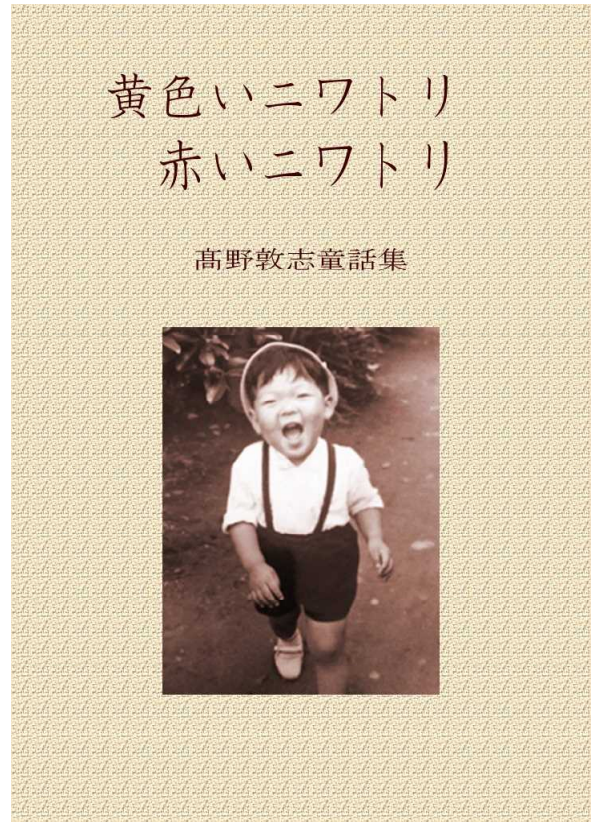


目次

黄色いニワトリ	48
子どもの作り方	26
インコのピーちゃん	12
あとがき	1

48 26 12 1



黄色いニワトリ 赤いニワトリ

まだ幼稚園に通っていたころ、おとうさんがダンボールの箱をかかえて帰ってきた。箱の穴からは黄色いくちばしがのぞき、ピヨピヨいう声までが聞こえてくる。目を輝かせて開けると、親鳥ほどに育った二羽のオンドリが飛び出した。うれしそうにはばたくと、ぼくの周りをくるくる回りはじめた。

おとうさんの友だちが縁日で買ったひよこで、狭い部屋では飼えなくなったから、うちにもらわれてきたという話だった。子ども目を喜ばせようと、ひよこの羽は黄色と赤に染められていた。生えたばかりの白い羽に混じって、元の鮮やかな色

もまだ残っていた。

新たに家族になった二羽のために、おとうさんは新しい木の匂いにする板を買って、ニワトリ小屋を作ってくれることになった。幼いぼくはノコギリが使えなかったから、おとうさんが挽いている間は、板の端をじっと押さえていた。赤ちゃんだった妹をあやししながら、おかあさんは目を細めながらぼくの方を見ていた。

トタンの屋根を取りつけ、正面には金網を張って、エサ箱も外から飼料を入れられるようにした。お百姓さんの庭で見たニワトリ小屋に負けないくらい、立派な小屋に違いなかった。ちよūdぼくの背が入る高さだったので、自分のうちを作ってもらったみたいで、ぼくは大はしゃぎだった。

「わーい、わーい」

ダンボールに閉じ込められていたニワトリも、広い小屋で動けるようになり、歩き回ってははばたきをし、夜明けでもないのにコケコッコーと鳴くのだった。

おかあさんにワラ半紙を買ってきてもらい、ぼくはクレヨンでニワトリの絵を描いた。二羽が生まれてからうちにもらわれてくるまでの物語や、ニワトリ兄弟の歌などを作っては、まだ言葉の分からない妹に、得意になって聞かせたりしていた。

ニワトリ小屋は北側の日陰にあつたので、昼間は日当たりのいい庭に放してやった。そこには大きな桃の木があつて、春には近所の人たちの目を引くほど、柔らかな色のピンクの花を、青空にくっきり浮かび上がらせた。二羽のニワトリは、桃の木

の根元で、エサを探すために地面をつついている。おとなしく並んでいることもあつたが、たまたま一羽が地面からはい出してきたミミズを見つけると、黒目の部分を小さくして、引っ張り合いを始めるのだった。

「ねえ、もつと仲良くしなきゃだめだよ」

ぼくは毎日、昼過ぎに幼稚園から戻るのが待ち切れなかった。若い女の先生や他の園児たちと歩きながら、心は一足先にうちに駆け戻ってしまっていた。やつと小さな門の前にたどり着くと、大きな声を張り上げて、鍵を開けて中に入れてもらった。

思っていた通り、ニワトリは庭で雑草をついばんでいた。ブランコの上に、肩から掛けていたカバンを投げ出すと、もう追いかけてっこを始めるのだった。

そのころ、南側の境には排水溝があつて、水をいっぱい張って金魚を放していた。ぼくが背後から近づくと、だいたい色の小さな魚たちは争うように、黒い影から逃れようと泳ぐので、かわいそうな数匹が疲れて動けなくなるまで、何往復でも追いかけて回したりした。

金魚たちをいじめている気はしなかった。犬と駆けっこしているくらいにしか考えなかった。おとうさんはあごに指先を当ててほほ笑んでいた。ぼくがポーズを取る前に、スナップショットに収めてしまうのだった。その様子を、黄色いニワトリはじっと眺めていたらしい。

ある日、ぼくが幼稚園から戻ってくると、黄色いニワトリが飛び出してきた。赤いニワトリは無関心らしく、庭木の根元を

ほじくり返しては、出てきたミミズと格闘している……。

「おい、ぼくをお迎えに来てくれたのかい？」

そう呼びかけて通り過ぎたとき、ぼくはふくらはぎに鋭い痛みを覚えて飛び上がった。どうやら黄色いニワトリは、ぼくをよそ者と思つて番犬の役を買つて出たか、いじめられた金魚を見て義憤にかられたらしいのだ。

「やめろよ。ぼくはおまえのご主人さまだぞ」

逃げ回るぼくを見たニワトリの方は、いじめの面白さを知つたらしく、それからは小さな門の前にぼくが立つと、待つてましたとばかりに、羽をばたつかせて寄つてきては、黄色くどがつたくちばしで、ももといふくらはぎといい、いやというほどつつき回すのだった。ぼくはいじめられる側のつらさ、とい

うものをはじめ知った。と同時に、いじめられるままになるのは、相手の思うつぼにはまるだけだ、ということにも気づかされた。そこで、逃げ回りながらも、口だけは強がりと言つてのけた。

「おまえ、そんなにぼくをつついていてると、しまいには焼き鳥にして食べちゃうからな」

ニワトリに人の言葉が通じるかどうか、ぼくは知らない。ただし、それを口にした時のこちらの怒りは、はつきり伝わっていた気がする。ぼくは黄色いニワトリと仲直りすることなど考えず、いきなり殺してしまおうと思ったのだから。単なる脅しに過ぎなかったのだけれど、十分過ぎる効果をニワトリに与えることになった。

明くる日からだった、ぼくが幼稚園から戻ってきてても、出てくる鳥の姿がなくなつたのは。黄色いニワトリは日に気弱となつて、つつこうとしないばかりか、こちらの姿を見かけると、逃げ回るといふありさまだった。ぼくは仕返しをしてやるつもりで、面白がつて追い回し続けた。棒など使つて小突きこそしなかつたが、ぼくが足に受けた痛みの数倍は、苦しめてやろうと思つたのだ。

はたで見ていた赤いニワトリまでが、いじめの面白さに取りつかれてしまった。多少かわいそうになつて、ぼくが追い回すのをやめてからも、赤いニワトリは黄色い兄弟をくちばしでしつこく攻め立てた。オス同士のなわばり争いのようだった。狙われたのは、一番の急所であるお尻だった。羽や固い骨に

守られることなく、肉がむき出しになっている部分で、ちよつとつつかれるだけで、鮮血が吹き出してくるのだ。血のしぶきを目にする、赤いニワトリの神経はますます高ぶっていった。――黄色いくせに、おまえの体にも赤い血が流れていたんだな。そうあざ笑うかのように、赤いニワトリは治りかけた兄弟の傷を、さらにつつき回すのだった。しまいには見ていられなくなり、いじめが始まるとやめさせていたが、ぼくが目を離れたすきに、また追いかけて始めてしまうのだった。

気がついて外に駆け出すと、黄色いニワトリは血まみれのまま、庭の芝生の上に横たわっていた。まだ生きてはいたけれど、荒い息をするように胸を大きく膨らませ、小さくつぶらな目は、黒い瞳がゴマ粒みたいに止まっていた。赤いニワトリはまだ

やり足りないのか、黄色い羽をくちばしで引き抜こうとしている。

ぼくの叫びを聞いたのだろう。おとうさんが物置から棍棒を取り出して、血を浴びてますます赤くなったニワトリを、そばから追い払ってくれた。荒かった息は急に弱まって、一・二度大きく息をすると、ぴくりとも動かなくなってしまった。

おかあさんがぼろ布で傷口をふいてくれたので、ぼくはまだ温かみのある死んだ体を抱き上げた。魂の抜けていった分、ニワトリは軽くなったような気がした。涙が込み上げてくると、あたりかまわず大声で泣き出した。黄色いニワトリが生きる勇気を失って、これほどあつけなく死んでいったのも、すべて自分のせいであつたように感じて。

冷たくなったニワトリの体は、その日の暮れる前に、いつも二羽が遊んでいた桃の木の下に埋められた。それから赤いニワトリはどうなったか、だって？ あいつのことは目にするのもいやだ、とぼくが言い張ったせいで、近所の米屋にもらわれていった。それについて詳しいことは、おとうさんもおかあさんも教えてくれなかった。おそらく、連れて行かれた日のうちに首を絞められ、晩のおかずに使われてしまったことだろう。

子どもの作り方

「もうすぐおにいちちゃんになるのよ」

ある日突然、三つだったぼくはおかあさんに言われた。そんなこと聞かされてもピンとこない。兄弟のうちの上がおにいちちゃんだ、ってことぐらいは知っていたけど。

おかあさんの体の中で何かが始まっていた。やせて小柄だったおかあさんは、日に日にお腹ばかりふくらんでいった。どうして子どもは生まれるんだろう。それが一番知りたいことだった。

ぼくはそのしくみを、自分なりにいろいろ考えてみた。結婚

したというだけで、女の人の体に変化が出て、赤ちゃんが出来てしまうのだろうか？

それじゃあ、生まれるときは、どこから出てくるんだろう。おかあさんのへその下にはおちんちんが付いていない。たてに長い切れ目があるから、もしかしたらそこからかもしかもしれないが、そんな小さな穴から赤ちゃんが生まれるとは、どうしても信じられなかった。ばかんとお腹が二つに割れて、桃太郎みたいに元気な赤ちゃんが飛び出すんだろうか？

こうした謎をおとうさんにきいてみると、おちんちんを女の人の穴に突っ込むんだと教えてくれた。

「へえ、ぼくのも入るのかな」

一人になったぼくは、社会の窓から引つ張り出すと、ブラブ

ラ下がった親指小僧を見た。きつとおとうさんは、ぼくをからかっているんだ。ぼくの小さくてやわらかいやつが、どうやったら女の人の体に入っていくんだろう。謎はますます深まるばかりだった。

それから数日たって、おかあさんは実家のそばにある大病院へ、入院前の検査を受けに行った。おかあさんが呼ばれて行くと、ぼくは廊下の長椅子にぼつんと残された。

うなだれてるのをかわいそうだと思ってくれたのか、看護婦さんが赤と紺の二色の鉛筆とわら半紙を渡してくれた。

そのころのぼくは白衣を着た女の人のことを、「かんごくさん」と呼んでいたつけ。それから、カレーライスと一緒に食べる赤い福神漬のことを、「女の子のおしんこ」と呼んでいた。

ぼくは「おちんこ」なんて言った覚えのないのに、「女にちんこなんか付いてないだろ！」っておとうさんに笑われたりした。その日、鉛筆と紙を渡されたぼくは、すぐに飽きてしまつて、おかあさんの姿を求めただけど、どこにいるのか全然分らない。ぼくは泣き声を上げて、おかあさんのことを呼んだ。自分がまだ赤ちゃんであるみたいにな……。

病院の外に出ると、日傘をさした着物姿のおばあさんが待つていた。白い髪を結び上げて、天辺をべっこう飴の色したくしで留めている。しわの刻まれた額の下には、静かにものを見る目があった。孫のぼくが近づいていっても、ニコニコ笑つたりしなかった。おばあさんはずっとむかしの「明治」という

時代に生まれた人だった。このちよつとこわそうなおばあさんこそ、ぼくのおとうさんのおかあさんだった。

「あなた、これからおにいちゃんになるんでしょ！」

まだ目をこすつていたぼくは、何でしかられているのか分からなかった。その時おかあさんは、おばあちゃんがぼくのうちに來ることになつていと言つた。赤ちゃんを産むために、おかあさんはしばらく家からいなくなるからだつた。

ぼくは不思議そうな目で、おばあさんの顔を見上げた。ぼくは八人目の孫だったから、子猫みたいにかわいがないんだらう。

おかあさんが入院してしまつと、おばあさんがぼくのうちにやつて来て、ご飯を作つたり洗濯をしたりしてくれた。片付

けをしてしまうと、おばあさんはお膳ぜんの前に座すわって、わけの分からぬいむかしの本を読み出した。何の話なのってきいたら、ヒカルゲンジのお話しよって教えてくれた。きつとホタルか何かが出てくる話なんだなとぼくは思った。

おとうさんはちゅうがっこう中学校で教えていたから、まだ幼稚園ようちえんに上がっていないかったぼくは、おばあさんと二人きりになった。むずかしそうな本を読んでいる間、声をかけると怒られそうな気がした。おとなしくおすわりすると、おばあさんの顔と本のページを見比べていた。そこにはひらがなにまじって、わけの分からない黒いしみが、秘密ひみつの絵みたいにならんでいた。おばあさんはなぞなぞでもしながら、たから探しをしているんだらう。ぼくはすぐに飽きてしまって、おとうさんの部屋の中を歩き

回った。本を読んでいたおばあさんは、落ち着かなくてしようがないといったようすで、「どうしたの」と自分の方からたずねた。

「あれって何て書いてあるの？」

おばあさんはニコリと笑った。何か良いことしたのかな。ぼくはうれしくなつて、次々つぎつぎに質問しつもんをしていった。

「それは宇治拾遺物語うじしゆいものがたり」

「うじちゆういものがたり？ あれは？」

「更級日記さらしな日記よ」

「ちやらちなにつき？」

ぼくは話をするのが苦手にがてだった。何かしゃべると、近所きんじよの子どもたちはゲラゲラ笑つて、ぼくにアカンベエをするのだから。

「赤ちゃん語しやべってらあ」

ぼくもおかしくなつて一緒に笑つた。病氣じゃないか、とお
かあさんは心配して、お医者さんに診せに行つたほどだつた。
そんなぼくだったから、おばあさんもうれしかったんだらう。

休みの日が来ると、ぼくのことを聞いたおとうさんに、「あ
の本は何だ」とよくきかれた。

「うじちゆういものごたり、あれはちやらちなにつき」

ひらがなを覚えるよりも前に、漢字が読めるようになったこ
とを、おとうさんも喜んでくれたらしい。でもぼくは、漢字
が文字であることを知らなかつたし、絵をならべたなぞなぞに
しか見えなかつたんだから。

そのころ、ぼくのうちでは、やかんで沸かした麦茶を洗濯機

のすすぎ水で冷やしていた。ようやくさめたところで、お父さ
んが空けたウイスキーのビンに注ぎ込んでいく。

その日もおばあさんは、家の仕事を終わらせると、休みでい
たお父さんの部屋に行き、次に読みたい本を探していた。その
すきにぼくは台所に駆け込んだ。前から謎に思っていたことを、
実験で確かめようと思つたからだ。

ビンに詰められた麦茶は、ニンジンやゴボウ、大根などとと
もに、注ぎ口を手前にして金の栓がさされていた。冷たい空気が
半ズボンに当たると、ものの周りが鶏肉の皮みたいになつて
いく。迷っているうちに、ビンはうつつすらと汗をかき出した。
ぼくはその口の方に手を伸ばした。

台所で何かやっていることに、おばあさんが気づかないはず

もなかった。ただ、ぼくの方が少し早かった。予想した通り
ことが起こったのだ。栓を外されたビンの口からは、ドクドク
と麦茶が流れ出し、床に茶色い地図を描いていた。得意にな
っておとうさんに知らせようとしたとき……

「何だい、この子は！」

思わず顔を上げたぼくは、今まで目にしたことのない、怒り
に震えているおばあさんを見た。その場にぼくがいることさえ
認めたくない、といった冷たさがあった。

しゃがんで床をふくおばあさんを尻目に、おとうさんの部屋
に逃げ込むしかなかった。寝転んで本を読んでいたおとうさん
は、大体のことが分かったんだろう。ぼくが起こったことを全部
話すと、おとうさんはしばらく考えていた。やがて思いついた

みたいに顔を上げて言った。

「おばあちゃんに謝っておいで」

ぼくに妹ができた、ということを知ったのは、それから十日
ほど過ぎてからだ。病院に見舞に行く朝、おばあさんにシ
ヤツのボタンをかけてもらおうと、出かけるのが待ち遠しくて、
畳の上で跳ね回っていた。

玄関でおばあさんは幸せそうな目で、ぼくとおとうさんを見
送った。階段を駆け下りると、おとうさんが後ろにいるのを確
かめながら、道路の上で丸くスキップした。お日さままでが、
妹が生まれたことを祝ってくれてるみたいで。

病室の中でおかあさんはベットに寝たきりだった。妹が逆さ

まに入っていたので、おかあさんのお腹はメスで切られて、糸で縫い合わされたばかりだった。おとうさんが教えてくれた穴からは、妹は出てこなかったというわけだ。

ぼくが駆け込んでいくと、おかあさんはゆっくり体を起こし、こちらに手を差し出してくれた。

「あの中に、いただきたいカステラがあるわ」

ベットの脇の引き出しを開けたとたん、箱の中の黄色い菓子から、カステラの甘いにおいがしてきた。おとうさんに切ってもらったカステラを、床にポロポロこぼしながら、口いっぱい食べていると、おまえはまったくリスだな、とおとうさんにやにや笑っている。甘えなくなつてベットの端に座つたけれど、ばねが跳ね返るのがおもしろくて、おかあさんの傷が痛む

ことなど忘れて、トランポリみたいにジャンプした。

「あらあら」

おかあさんの体温を計りにきた看護婦さんは、それを注意しようとして、吹き出してしまったらしい。妹の顔が見たいと言うと、子どもはそこには入れないのよ、という答え。でも入口からだったから見せて上げるわ。看護婦さんに連れられて、のぞき窓のついたドアの前で、ぼくはだっこしてもらった。

「ほら、右から三番目の子よ」

妹はまだガラスの箱の中に入れられていた。そんなこと言われてもピンと来ない。赤ちゃんはまわりのおサルさんたちと、大して変わらない顔をしていた。妹が生まれたのを知り、おかあさんのお腹を引き裂いて出てきた、ということまで分かった

が、どうすれば子どもが作れるかは、いくらおとうさんに説明
してもらっても、中学生ちゅうがくせいになるまでずっと謎めいだった。

インコのピーちゃん

ぼくが高校こうこうに入って最初の冬ふゆのことだった。夜中まで降って
いた雪ゆきがやんで、窓からは白く化粧けししょうした木々の枝が、朝の光
を浴びて輝かがやいていた。風はやんでいたけれど、寒さはきびし
くなっていた。小さな平屋ひらやのうちの中では、ご飯を食べるキッ
チンだけストーブがたかれていた。ぼくが茶碗ちやわんを手にして、ご
飯を食べていると、窓辺まどべに立っていた妹が声をあげた。

「ほら、こんなところにインコが……」

声こゑに誘さそわれて目をやると、格子窓こうしまどのガラス越し、雪の吹きつ
けた柵わくの上に、まだ幼おきないセキセイインコが止まっていた。小鳥ことり

は寒さに震えているのか、暖かい室内をじっと見つめている。生まれたときから人に飼われていたのが、たまたま開いた窓から逃げ出して、雪のせいで体が冷えきっていたのだろう。

「中に入りたがっているのかな」

恐る恐る窓を開けてやると、動かずにいたインコは、差し出された手の甲にちよこんと乗った。冷たい空気が吹き込み、あわてて窓を閉めたときには、インコはうちの家族になつていた。目の下に白い羽の生えた鳥は、黄色い翼が左右そろつていなかった。生まれつきそうなのか、事故のために骨が折れて、そのまま固まってしまったのか、それとも、遠くへ飛べないように、翼の一部を切り取られていたのだろうか。

手から下りたインコは、えさでも探すみたいにテーブルの上

をついばんでいる。パンを小さくむしってやると、のどを詰まらせそうにして食べる。お腹がいっぱいになると、幼い子ども目で、わたしはいったいどうなるの、と問いかけてくる。

意地の悪い子に見つけられていたら、小石をぶつけられて死ぬか、首をしめられてしまったら。それほど人を恐れることを知らなかった。もしお腹をすかせて動けなかったら、カラスにくちばしで食いちぎられるか、ネコのおもちゃにされて、死ぬまで小突き回されていただろう。だから、ぼくの家に迎えられたことは幸せだったのか？

インコを外に放してやる、という考えは浮かばなかった。それは飛ぶのが苦手なこの鳥を、死に追いやることになるからだ。のんびりくらす代わりに、おまえは大空を飛ぶ自由を捨ててし

まったんだよ。

ぼくはインコをピーちゃんと呼ぶことにした、家族の一員なのだから、できることなら部屋の中だけでも、飛べるようにしておきたかった。しかし、ぼくが学校に行っている間は、部屋を汚すからと許してもらえなかった。

物置の中には以前飼っていたカナリアの、青い小さな鳥籠がしまつてあった。疑うことを知らないインコは、手の甲に乗ったまま捕らえられ、籠の中に閉じ込められてしまった。何が起こったのか、まったく分からないといった様子だった。激しく羽をばたつかせ、針金の格子に飛びついたまま、きいきいと叫

びを上げている。こんな仕打ちをされるようなことを、わたしがいつしたの？ とでも言うように。

夕食を終えてから風呂に入るまでが、とらわれの身となった鳥の自由な時間だった。扉を開けようと手をかけると、待ち切れなくなった鳥は、止まり木に逆さにぶら下がったまま、身を乗り出してこちらを見る。出口を開けたとたん、激しく翼をばたかせて、じゅうたんの上で小躍りを始める。

五・六度あたりを跳ね回ると、一気にカーテンの上まで舞い上がり、誇らしげにこちらを見下ろしている。眠くなって舟をこいでいるうちに、落ちそうになったところで、ぼくの肩の上まで舞い下りてきた。

首を横に向けると、ピーちゃんは米粒よりも小さな目で見つ

め返す。黒い点みたいなレンズの中に、ぼくの顔が収まってい
るなんて、ちよつと信じられなかった。こちらが唇を動かして
見せると、インコもくちばしをもぐもぐさせる。本のページ
に目を移すと、さびしくなったのか、ちよこちよこ腕を伝って
下りてくる。手首のあたりに止まったまま、字を追うぼくの目
をまじまじと見つめる。

何だかかわいそうになり、ピーちゃんの方に目を向けると、
インコの表情は変わらないけれども、不思議に落ち着いた様
子で、飽きることなくこちらを眺めている。まるでおばあさん
が、幼い孫をいとおしむみたいに。

本を片付けたぼくは、今度は日記をつけ始める。ペンを握つ
て書くことほど、インコの心をいらだたせることはなかった。

書き進めている間は、体が揺さぶられて落ち着かない上に、鳥
を無視しているのは明らかだからだ。ペンを目の敵にして、
戦いを挑むピーちゃんは、鋭い叫びとともに、黒目の部分を点
に縮ませ、ペン先にくちばしで激しい攻撃を加える。ぼくが構
わずペンを進めると、これでもかこれでもかと、気絶しかねな
い勢いでつつき続ける。たまりかねてペンを投げ出しても、
インコの怒りはすぐには解けず、小さなくちばしでペン先をつ
かみ、机の上でひきずり回してしまうほどだ。

そこでちよつとしたいたずらを思いついた。インコを手の甲
に乗せたまま、洗面所の鏡の前に近づけていった。目の前にも
う一羽の鳥が現れたと思ったのか、頭の上の毛を鶏冠みたい
に逆立たせ、おどそうとしてにらみつける。小癩なことに、向

このインコは真似をする。くちばしでつくと、歯向かつてくるではないか。抗議で上げた自分の叫びでさえ、ピーちゃんには敵の怒りに聞こえているのだらう。相手がペンの時とは違って、一方的にこらしめるわけにもいかない。くちばしによる攻撃と、ぶつかつた痛みによる悲鳴、という繰り返して、インコは気が変になりそうになる。ようやくぼくは、インコを鏡の迷宮から解放してやることにした。

寝床の支度をする前に、ピーちゃんを籠に入れなければならぬ。畳のイグサをくちばしで引つ張つているところを、そつと後ろから忍び寄るのだが、インコも同じ手にはかからなくなる。影が迫るのを感じると、キーキー叫び声を上げて逃げ回る。鳥目という言葉があるように、常夜灯だけにするともう飛べ

ずに、絶叫して掌の中で暴れるのだ。

やがて、おとなしくつかまるのが楽だと分かつたのだらう、明るいまま追い立てるだけで、自分から籠の中に入ってくれるようになった。ただし、昼間はずっと閉じ込められたままなので、一月もたたないうちに、カナリアが住んでいたわらの巢は、見るも無残にむしられてしまった。

それから数ヶ月のうちに、インコはすっかりなついて、ぼくが鳥籠のそばに寄るだけで、バレリーナのおじぎみみたいに、左右の翼であいさつしてくれるようになった。母が話をしている時など、耳を傾けるような素振りを見せる。何か小言を口に

していると、母の口調くちようそつくりそつくりに真似て見せる。一つ一つの発音はあいまいだけれど、短い言葉ならばつきり言えるようになった。「おはよう」と声をかけると、すぐに「おはよう」と返ってくる。

「ピーちゃん」

「……？ ピーちゃん」

インコは自分の名前を呼ばれているとも知らずに、ただ口真似しているだけなのだろう。まったくのおうむ返しというのはつまらない。ここでちよつと、悪い言葉でも覚えさせてやろうと思った。

「おい、おまえはバカか」

「アツシ！」

これはまったくの偶然ぐうぜんだったが、名前を口にされてぎよつとした。恐らくは母がぼくを呼ぶ声を耳にして、たまたま口にしてみただけだったろうが。

心が通じるようになってくると、小鳥でも人の心を理解しようとする。こちらがどうすれば喜ぶか、あの小さな頭で考え出しているらしい。

人の肩に止まったピーちゃんに、赤ん坊をあやすみたいになると、何度かはばたきをしてくれる。わざと驚いて見せると、調子に乗ったインコは、翼の勢いで飛ばされそうになりながら、爪を立ててはばたき続けるのだ。人を喜ばすのがインコにとっても、やはりうれしくてならないのだろう。

自然の中で鳥と鳥が、そこまで心を通かよわ合あっているだろう

か。たぶんひなのころから人に接することで、人間の気持ちを
知るだけの知恵がついたのではないか。

どうやらピーちゃんは、ぼくを仲間だと思っ
ているらしく、テレビを見ている時などに、肩から腕に下りてきて、こちらの
顔を見つめ、どうして二人一緒にいるのに、相手してくれない
のか、といった表情をする。それでもぼくが画面を眺めている
と、そんなに面白いなら、自分にとつてもためになるはずだと、
言葉も分からないくせに、腕に止まったまま、テレビに見入っ
ているのである。それでも、音楽番組は好きらしく、メロディ
ーに合わせて、多少音程のはずれた独唱を聞かせてくれたり
する。

ぼくとピーちゃんの信頼は築かれたわけだが、しばらくして
強力なライバルが現れた。生まれて一月足らずの子犬を、妹が
もらってきてしまったのである。胸に抱かれていたのは、茶色
い毛並みの柴犬で、人間の赤ん坊と同じく、ちっちゃな体に丸
く膨らんだ目と黒い鼻が大きく、母親から引き離されたのを知
って、おびえるように縮こまっていた。

「へえ、かわいいもんだな」

妹の腕の中をのぞき込んで、あどけない顔に見とれていると、
居間で遊んでいたインコが、一体何事かと血相を変えて、突っ
込むみたいな勢いで、玄関前の廊下まで飛び出してきたのだ。
恐らく動物の勘で何か重大なことが起きたのを、知ったに違

いなかつた。今まで独り占めしていた皆の関心が、生まれたばかりの強敵きょうてきに奪さらわれるのだと。

確かにぼく以外には、ピーちゃんを構かまってやらなくなり、旅行に出かけている間なども、籠の中に入れられたままだった。そのためだろう、インコは子犬に対して、ますます敵意てきいをあらわにするようになった。

初めのうちダンボールの箱に寝かされていた犬は、父がリンゴ箱で作った小屋に移された。牛乳沸かしで柔らかく煮たおかゆを、冷ますために縁側えんがわのじゅうたんの上に置くと、カーテンからインコが飛んできて、鍋なべの柄えの部分ぶぶんをくちばしではさむと、体のどこにそんな力があるのか、と思えるほどの勢いで、ぐるぐる鍋を回してしまう。えさをやって空からになっっている時など、

腹癒はらいせにつつき回したあげく、中に入ったスプーンもろともひっくり返してしまうのだった。

ある春の午後、ぼくが子犬の様子を見ようと、インコを放しているのも忘れて、うっかり窓を大きく開けた時だった。わずかなすきに、ピーちゃんはパツと軒先のきさきに飛んでいくと、小屋の中で居眠りいねむしている子犬など見向きもせず、つぼみが膨らみかけた桃の枝に移っていった。

あわてるぼくをよそに、そちらの枝、あちらの枝と移りながら、長い間味わえなかつた外の空気を、思うままに楽しんでいようだった。もうあなたがたには愛想あいそを尽つかしましたよ、とでも言うように。

インコは次第しだいに庭の端の方に移っていった。このまま通りの

電線にまで行ってしまったら、我が家に戻ってくることはないだろう。ぼくはここ数ヶ月のピーちゃんに対する、冷ややかな態度について思った。心のつながりは切れかけている！ 薄れかけたピーちゃんへの思いがよみがえり、遠ざかろうとする黄色い翼に向かつて祈った。ぼくのことを見捨てないでくれ、もう一度だけチャンスをくれ、と。インコは青空高く舞い上がったかと思うと、大きく弧を描いてはばたきながら速度を落とし、ぼくの肩の上にちよこんと乗った。

ピーちゃんとぼくはまた仲良しになった。けれども、秋が過ぎて冬が訪れるころには、また関心は薄れてしまったのだ。

自分の心をとらえていたのは、大きく成長した柴犬と一緒に、野山を駆け回ることだったからだ。

夕食を済ました後、申し訳程度に部屋で放すだけで、糞をするから汚いという母の苦情もあつて、早々に籠の中に戻してしまうようになった。インコをはじめ熱帯原産の鳥は、とりわけ真冬の寒さには弱い。夜遅くなる前に、インコの籠には黒い布をかけていた。冬場は食べる量もふえる。朝にやったえさの箱が、晩には殻だけになっている。粟を入れてやると、気が狂ったみたいに、目の色を変えてのどを詰まらせるほどの勢いで、数分間は食べ続けていたりする。

ぼくの就職活動が始まっていた。インコを構ってやる余裕

はなくなり、えさをやるのも母に任せつきり、何日も相手をしてやらないこともあった。ふとんを敷いていると、黒い布の下でガサガサ暴れていたが、それも大して気には留めなかった。朝になって雨戸を開けると、久し振りにインコの顔が見たくなって、黒い布をそつと外してみた。止まり木には鳥の姿はない。籠の底にインコは横たわり、えさ箱の中に頭を突っ込んでいた。粟の殻さえも食べ尽くして、じつと動かぬままだった。

「ピーちゃん死んだ！」

思わず叫んで台所に走り込んだ。ぼくは自分の言葉が裏切れ、死にかけてインコが命を取り留めるようにと、心が張り裂けそうになっていた。

恐る恐る籠の中に手を入れると、掌にインコを載せて取り

出した。羽はすでに乾き切っており、体は驚くほど軽くなっている。生きていた時の信じられないほどの力は、何かと一緒に抜けていってしまったようだ。まだ体には温もりがあったので、生き返らせようとして、電気ストーブで暖めたりしたが、足はぶらぶらと左右に揺れるばかり。開けたままの瞳もやがて乾いて、首もだらりと垂れ下がってしまった。

ぼくはようやく、自分がピーちゃんにした仕打ちを思った。雪のやんだ朝、たまたまぼくの家を訪ねて、心を開く機会を得て、自分を人間のように感じるようになったのに。心変わりをしたぼくは、あいつを籠に閉じ込めたままにしていた……。

心の結びつきを知った鳥にとつては、人間に劣らない苦しみだったろう。素直な気持ちしか抱かず、文句を言うこともでき

ない分だけ……。いつそのこと、情なさけなどかけてもらえず、一生籠かごに閉じ込められたままの鳥の方が、期き待たいに身こを焦こがさない分だけ、苦しみは少ないのではないか。

ピーちゃんが生んでからは、ぼくはもう鳥を飼うことをやめた。子どもだった柴犬も、十年以上たつて死んだ。今ではぼくの庭に見られるのは、スズメとヒヨドリ、ヤマバト、ノラ猫ぐらいなものだ。こいつはぼくのものだなどと、勝手な思いいを抱いだくこともない。

人間の心など知らない方が、自然のままに生きた方が、動物にとつては幸せだからだ。籠かごの中に閉じ込めたり、鎖くさりでつないでおくなんてもうこりこりだ。

それからというもの、庭を花でいっぱいにすることにした。

今はツツジが満まん開かいだし、少し前まではジンチョウゲが、つつましやかな香りで、穴あの空あいた心を慰なぐさめてくれていた。鉢はち植ちえのスマレやマツバボタンも、水を欠かさずやることで、つぼみを大きく膨ふくらませていく。夏の夜、ただ一夜だけ、みだらな白い花を咲かせるクジャクサボテンなどは、我わが家やが誇ほこれる幻まぼろしの花だろう。

みずみずしい花々の姿を見ると、自分が生きているという感かん覚かくがよみがえってくる。けれども、ぼくの夢の中に出てくるのは、死んでしまった動物たちばかりで、インコはいまだに肩に止まって、老人の繰くり言ことみたいは何かしやべっているし、おとし死んだ柴犬だって、元気に走り寄ってきて、ぼくの頬ほおをぺろりとなめてくれる。それはぼくがまだ幸福だったころの思い

出と、一つになっているからだろう。

あとがき

ここで取り上げた三篇は、僕にとっては幼時から、成人したころまでの思い出が元になっている。童話集と銘打ったけれども、子どもに読ませるのに適しているかどうかは、はなはだ疑問である。ただし、小学生が読んでも分かるように、難しい表現は極力避けて、読みにくそうな漢字にはふりがなを多数つけた。

二〇一三年一月十八日

高野敦志